

## 自己評価報告書

平成 23 年 5 月 16 日現在

機関番号：21401

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2012

課題番号：20520167

研究課題名 (和文) 新資料による小牧近江研究

研究課題名 (英文) A Study of Omi Komaki with New Material

研究代表者

高橋 秀晴 (TAKAHASHI HIDEHARU)

公立大学法人秋田県立大学・総合科学教育研究センター・教授

研究者番号：40310982

研究分野：

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：日本近現代文学 プロレタリア文学 「種蒔く人」 小牧近江 金子洋文 今野賢三

## 1. 研究計画の概要

本研究の目的は、雑誌「種蒔く人」の創刊者として近代史にその名を刻まれている小牧近江の全体像を、遺族（小牧の孫・桐山香苗氏、鎌倉市在住）から新たに秋田県に寄託された資料群によって明らかにすることである。

膨大な新資料の整理・分析を通じて、フランスにおける思想形成のプロセス、パリ講和会議で果たした役割、仏領インドシナ（ベトナム・ラオス・カンボジア）における活躍といった小牧の国際性の具体的な相を明確にする。また、戦後の交友関係や私生活等について、自著で述べていることを裏付けると同時に、新たな事実の発見に努める。

国際人、思想家、労働運動家、文学者、研究者、教育者等、多くの顔を持つ小牧近江の存在意義を問う行為は、近現代文学史を補うことを意味するのみならず、日本、フランス、仏領インドシナの近現代史の一角を検証することともなるだろう。その点も遠望しつつ、本研究を進めてゆく。

## 2. 研究の進捗状況

平成 20 年度は、新規寄託の小牧近江書簡中、特に重要なものを翻刻しその意義について考察した。小牧とフク夫人の結婚前後の書簡には、生涯続いた夫婦愛の原点を見ることが出来る。また、雑誌「種蒔く人」同人の金子洋文、今野賢三をはじめ、鷲尾よし子、むのたけじらからの書簡は、小牧がいかに生れ故郷である秋田県との繋がりを大切にしていたかを物語っている。一方、堀口大学からのフィリップ訳書の寄贈に対する礼状には「ゆくゆくは全集を御出版の由」とあって、

小牧の（実現しなかった）構想の一端が窺える。他に、小林多喜二からの寄稿依頼の葉書、江戸川乱歩の協力要請のエア・メール、「パリ燃ゆ」の執筆に小牧が協力していたことを証明する大仏次郎書簡等、文学史的に貴重な書簡を多数発見することができた。

平成 21 年度は、パリ在住時代の状況について調査を進めた。新資料である 1918 年 10 月 11 日付近江谷晋作宛書簡は、ドイツ軍の攻撃を受けるパリの様子が克明に記載された貴重なものであった。それについての小牧の感想も、後の反戦平和思想の原点と見なし得るという意味で重要である。また、画家の藤田嗣治との関係についても調査、ラ・ベル・エディション社から刊行された『詩数編』（小牧の詩と藤田のデッサン 12 点とを組み合わせ合わせた冊子）の背景について明らかにした。

平成 22 年度は、仏領インドシナ史の概略を捉えた上で、この時期の小牧の詳細な年譜を作成した。その際、新規寄託資料によって、小牧が日本文化会館に就職したのが 1944 年ではなく 1943 年 11 月 1 日であったこと、またハノイ事務所長となったのが 1944 年ではなく 1945 年 6 月 5 日であったこと等、多くの新事実が判明した。

また、寄託資料にあったスクラップや遺族・親族の証言により、ベトナムの八月革命の状況およびベトナム人との交情の様子等を明らかにすることができた。

## 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

平成 20 年度は、主に写真・書簡の整理を行う予定であった。あきた文学資料館と連携

をとりながら、小牧夫婦の往復書簡を翻刻・分析した。結婚（1922年11月15日）する直前の往復書簡には、双方の素直な愛情表現が散見される。この時期は、雑誌「種蒔く人」が第二年に入りいよいよ充実し始めた時であった。外務省勤務の傍ら、対露非干渉運動に参加したり、「ロマン・ロラン対アンリ・バルビュスの論争」を完訳するなど多忙を極めた日々の中にも、結婚を前にした華やぎや準備があったことがわかる。また、1965年12月13日付山川菊枝書簡には、ジャン・ジョーレス（フランスの社会主義者）暗殺によって受けた強い衝撃、大杉事件に関わる臨場感溢れる感想等が記されていた。さらに、アンリ4世校の同級生だったピエール・ド・サン・プリ（元フランス大統領ルーベ氏令孫）の書簡も新たに確認されたが、それによってサン・プリー家のその後の消息や小牧への敬慕の情が明らかとなった。

平成21年度は、当初戦前期（1924年～1939年）を対象に資料整理する予定であったが、実際にはそれ以前のパリ時代を中心に調査・考察をした。フランス史、第一次世界大戦、ベルサイユ条約、藤田嗣治等の周辺事項をまとめるのに予想以上の時間を要したからである。その分、この期の小牧をより立体的に把握することができた。

平成22年度は、予定通り、仏領インドシナ滞在期（1939年～1946年）を対象に研究を進めた。寄託資料の調査によって、従来の年譜の追加・訂正をすることができた。その上で、2011年2月13日から約一週間の日程でベトナムにおいて現地調査を行った。フランス大使館の協力を得た結果、勤務先である印度支那産業、日本文化会館、そして小牧の住居等を特定することができた。

#### 4. 今後の研究の推進方策

基本的には、当初の予定に従って、戦後期の検証（平成23年度）と総括（平成24年度）を行うものとする。

平成23年は、雑誌「種蒔く人」創刊90周年に当たる。10月8日には記念事業（高橋が実行委員会事務局長）として講演（小森陽一東京大学教授）、研究発表、シンポジウムを開催する運びとなっている。また、「社会文学」（日本社会文学会）では、「種蒔く人」特集を組む予定で、高橋はその編集委員を務めることになる。こうした動きを視野に入れながら、ハノイ時代から戦後にかけての小牧近江の活動状況を調査したい。

平成24年度は、最終年度に当たる関係で、過去四年間着手できなかった部分（トルコ大使館での状況、「ハノイ・ノート」の翻訳、作家小松清との関わり等）をフォローしつつ研究全体を総括するつもりである。

#### 5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 高橋秀晴、「未発表書簡が語る小牧近江の新側面」、「秋田文学」、第4次第18号、68-78、2009年、査読なし
- ② 高橋秀晴、「小牧近江と環「日本海」—新規寄託資料の可能性を遠望しつつ—」、「社会文学」、第29号、117-126、2009年、査読あり

〔学会発表〕（計3件）

- ① 高橋秀晴、「小牧近江と終戦」、秋田風土文学会、2011年2月11日、あきた文学資料館
- ② 高橋秀晴、「小牧近江とパリ」、秋田風土文学会、2010年2月11日、あきた文学資料館
- ③ 桐山香苗、大地進、高橋秀晴、佐々木久春、「種蒔く人」を支えた人」、日本比較文学会東北支部、2008年11月29日、あきた文学資料館

〔図書〕（計3件）

- ① 佐々木久春、高橋秀晴、三浦基（他5名、2番目）編、無明舎出版、『改訂 秋田—ふるさとの文学』、2011年、全167頁
- ② 佐々木久春、高橋秀晴、三浦基（他5名、2番目）編、無明舎出版、『秋田—ふるさとの文学』、2010年、全156頁
- ③ 高橋秀晴、秋田魁新報社、『秋田近代小説／そぞろ歩き』、2010年、全177頁

〔その他〕

報道関連情報

- ① 「秋田市で日本比較文学会東北大会／小牧近江の世界紹介／桐山さん祖父の思い出語る」（「秋田魁新報」、2008年11月30日）
- ② 「月曜論壇／「種蒔く人」と桐山さん」（「秋田魁新報」、2008年11月24日）

ホームページ情報

<http://www.akita-pu.ac.jp/stic/souran/scholar/detail.php?id=111>